

# zoo も！おか

---

第14号 2005



盛岡市動物公園



# 次

- ・ 表紙説明 (ニホンイヌワシ) .....2
- ・ テーマ：ニホンイヌワシ.....3
  - ・ イヌワシってどんな鳥？.....4・5
  - ・ ニホンイヌワシの食性<sup>しよくせい</sup>.....6・7
  - ・ つがい関係<sup>かんけい</sup>と子育て<sup>こそだ</sup>.....8・9・10
  - ・ 岩手県で絶滅<sup>ぜつめつ</sup>が心配されるワシタカの仲間 .....11
  - ・ ニホンイヌワシを守るために.....12・13
- ・ どうぶつこうえんうらばなし.....14・15
- ・ 園内の自然 .....16

## ニホンイヌワシ タカ目 タカ科

表紙の写真は盛岡市動物公園で飼育<sup>しいく</sup>しているニホンイヌワシのメス、愛称<sup>あいしょう</sup> = 『空』です。秋田市大森山動物園で長年積み上げた努力<sup>どりよく</sup>の成果<sup>せいこ</sup>として初めて繁殖<sup>はんしよく</sup>した個体で、2003年4月に生まれました。野生のニホンイヌワシが絶滅<sup>ぜつめつ</sup>に瀕<sup>ひん</sup>する中、飼育下での繁殖<sup>はんしよく</sup>、研究<sup>けんきゆう</sup>を目的<sup>めい的</sup>に借り受けたもので2004年春から展示<sup>てんじ</sup>しています。まだ目が茶色、嘴<sup>くちばし</sup>の半分が黄色という若い個体の特徴<sup>とくちょう</sup>を残<sup>のこ</sup>していますが、体格<sup>たいかく</sup>はもう立派<sup>りっぱ</sup>です。同じようにして来園<sup>きえん</sup>した東京都多摩動物公園生まれのオス『出羽』との相性<sup>あいしやう</sup>はととてもよく、いつも寄り添<sup>よ</sup>っています。数年のうちですっかり大人<sup>おとな</sup>になりますが、何とか繁殖<sup>はんしよく</sup>させたいと強く願<sup>ねが</sup>っています。

# テーマ ニホンイヌワシ

イヌワシ (Golden Eagle) はタカ目タカ科に属し、ヨーロッパから北アメリカまで北半球に広く分布します。地域により6つの亜種に分けられ、体の大きさや羽の色がそれぞれ少し違います。日本と朝鮮半島に分布するニホンイヌワシは体が少し小さめです。

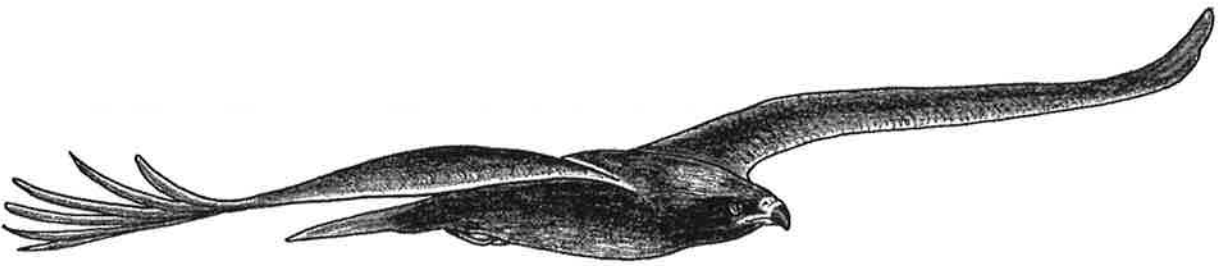
1965年には国の天然記念物に指定され、さらに1976年、岩手県の岩泉町がその繁殖地として天然記念物に指定されています。

その数は急激に減少しており、絶滅の恐れのある野生動物について環境省がまとめるレッドデータブックでも近い将来に絶滅の危険性が高い絶滅危惧IB類に指定されています。

岩手県では日本の他の地域と比べ相対的には多く分布しており、盛岡市内にも長年観察されてきた営巣地があり、これを保全するため盛岡市と日本野鳥の会が土地を買いあげ守っています。動物公園のはるか上空を滑空するのを目撃したことがありますし、県内にはいつも学校の上空を飛ぶイヌワシに憧れ、みんなで生態について学習している小学校があります。直に目撃するチャンスがあり、まさに空の王者として畏敬の念を抱く、そんな存在であり、いつまでもそうあって欲しいと思います。

盛岡市動物公園では2004年春より新たに2羽のニホンイヌワシ、オスの愛称『出羽』とメスの『空』の飼育展示を開始しました。展示によりイヌワシの現状と保護の必要性を一人でも多くの人に理解してもらいたいと考えており、また2羽での繁殖を目指します。

今回の特集「ニホンイヌワシ」ではその生態を解説し、守るために必要なことを考えます。



## 引用文献

- 1) 日本イヌワシ研究会。1984。日本におけるイヌワシの食性。日本イヌワシ研究会誌。2:1-6。
- 2) 鈴木正利・文花繁信。1991。南三陸における繁殖状況と巣内雛の死亡。日本イヌワシ研究会誌。8:10-12。
- 3) 芥本孝。1989。ニホンジカの死肉を食したイヌワシの観察例。日本イヌワシ研究会誌。15:10-13。
- 4) Watson, J. 1997. The Golden Eagle. T&AD POYSER, London.
- 5) 日本鳥類保護連盟。2004。種少猛禽類調査報告書(イヌワシ編)。
- 6) 岩手県環境保護部。1993。特殊鳥類生態調査報告書野生鳥獣保護調査事業・第2期調査。
- 7) 竹内守ら。2003。イヌワシを頂点とする生態系の解明-秋田県駒ヶ岳におけるイヌワシの馴致入量とその捕食-。電中研報告 UQ3006:1-15。
- 8) 青山一郎ら。1988。北上山地におけるニホンイヌワシの繁殖行動。日本イヌワシ研究会誌。6:14-23。
- 9) 樋口直人ら。2003。イヌワシ営巣地から採取した腐動物の残渣分析と繁殖失敗原因について。日本イヌワシ研究会誌。19:14-23。
- 10) 日本イヌワシ研究会・日本自然保護協会。1994。秋田県山形県胆沢山麓イヌワシ調査報告書。日本自然保護協会報告書97号。東京。
- 11) 日本イヌワシ研究会。2002。ステージ別に見たイヌワシの行動圏の変動と行動様式の変化。日本イヌワシ研究会誌。18:1-32。
- 12) 日本イヌワシ研究会。1998。リモートセンシングによるイヌワシの生息地環境調査。日本イヌワシ研究会誌。14:1-16。
- 13) 間山房兵。1989。盛岡市文化財シリーズ31 盛岡の天然記念物(イヌワシ)。pp.5-17。盛岡市教育委員会文化課。岩手。
- 14) 小島幸彦。1989。新潟県下の多雪地帯におけるイヌワシ営巣地の特性。日本イヌワシ研究会誌。7:25-28。
- 15) 須藤一成ら。2003。特殊イヌワシとクマタカ。Birder'J7(2):11-39。
- 16) 小島幸彦。1996。イヌワシその生態と生息状況-。自然保護。408:6-9。
- 17) 日本イヌワシ研究会。2000。飼育下におけるニホンイヌワシの繁殖。日本イヌワシ研究会誌。16:14-26。
- 18) 中条正英ら。1983。イヌワシの東内ビナの羽毛の成長過程について。日本イヌワシ研究会誌。1:26-31。
- 19) 日本イヌワシ研究会。1992。全国イヌワシ生息数・繁殖成功半調査報告(1981-1990)。日本イヌワシ研究会誌。9:1-11。
- 20) 岩手県生活環境部。1999。野生生物保護対策事業調査報告書(イヌワシ生息状況調査)。
- 21) 日本鳥類保護連盟。1995。イヌワシ保護地候補基本調査調査報告書。
- 22) 山井正敏。2005。国内における猛禽類の現状と保護対策-特にイヌワシとクマタカについて-。私たちの自然。504:16-19。
- 23) 日本イヌワシ研究会。1987。ニホンイヌワシの行動圏(1980-86)。日本イヌワシ研究会誌。5:1-9。
- 24) 日本イヌワシ研究会。1997。全国イヌワシ生息数・繁殖成功半調査報告(1981-1995)。日本イヌワシ研究会誌。13:1-8。
- 25) 日本イヌワシ研究会。1994。開発行為からのイヌワシ生息地の保全対策。日本イヌワシ研究会誌。10:11-28。
- 26) 日本イヌワシ研究会。2001。全国イヌワシ生息数・繁殖成功半調査報告(1996-2000)。日本イヌワシ研究会誌。17:1-9。
- 27) 日本イヌワシ研究会。2003。イヌワシにおける繁殖失敗の原因(1994-2000)。日本イヌワシ研究会誌。19:1-13。
- 28) 日本イヌワシ研究会。1996。イヌワシの未孵化卵における環境汚染物質の残留について:イヌワシの死亡原因調査(第1報)。日本イヌワシ研究会誌。12:1-10。
- 29) 秋田県生活環境部。1994。秋田県山形県胆沢山麓イヌワシ生息調査報告書。
- 30) 秋田県生活環境部。1998。イヌワシ生息地環境整備事業調査報告書。
- 31) 日本自然保護協会。1993。特殊秋田県駒ヶ岳にイヌワシを追う-3年間の調査結果報告-。自然保護。379:4-9。
- 32) 日本自然保護協会。1994。山形県イヌワシ調査でワゾー計測全面見直し。自然保護。384:24-25。
- 33) 日本動物園水族館協会。2004。ニホンイヌワシ国内生息数調査報告書。
- 34) 小島善隆。2001。ニホンイヌワシのセナ移入シミュレーション。多摩動物公園飼育研究会報告集。29:77-79。



# イヌワシってどんな鳥？ 一 体の特徴

ここではニホンイヌワシの体の特徴を紹介します。

## ◎大人の平均的な大きさ

全長	オス	81.5cm	メス	89cm
翼開長	オス	170cm	メス	210cm
体重	3.2~5.5kg (ただし、野生個体について正確にはわかりません。)			

オスよりもメスの方が大きく、並んで飛んでいればすぐに見分けがつくほど差があります。

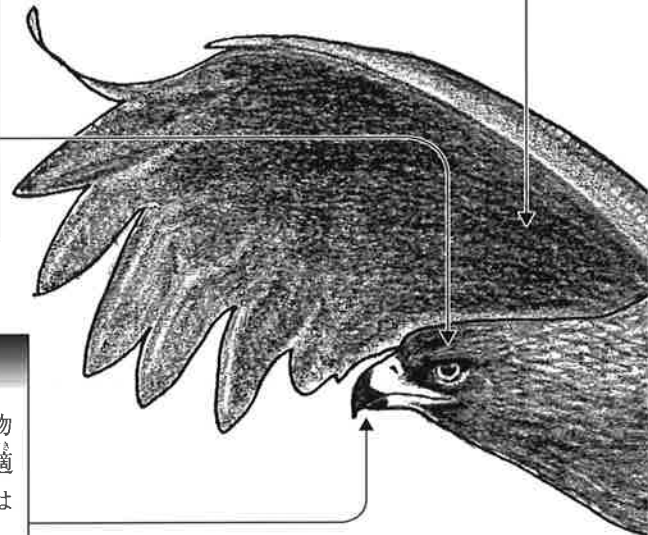
## ◎羽毛の色

オス・メスともに同じ色で全体に暗い褐色ですが、後頭部は光があたると黄金色に見えます。これがイヌワシの英名「ゴールデンイーグル」の由来です。

## ◎目

頭の大きさと比べて相対的に大きな目をしています。光を感知する細胞の数から、視力は人間の8~10倍であるといわれており、地上にいる獲物をはるか上空から見つけることができます。

そのうえ、動く物を感知する器官がとてもよく発達しているため、遠くにいる獲物の動きを素早く察知できます。また、遠くの物も近くのものも、すぐにピントを合わせられる仕組みがあるので、見つけた獲物に向けて猛スピードで急降下しても見失うことはありません。



## ◎くちばし

かぎ状に曲がったくちばしは太くて鋭く、捕らえた獲物を引きちぎったり、毛や羽根をむしり取ったりするのに適しています。獲物を襲う道具としてくちばしを使うことはありません。

## ◎鳴き声

「クワックワッ」「キャッキャッ」とよく通るかん高い声で鳴きます。繁殖期以外は、あまり鳴くことはありません。

## ◎幼鳥

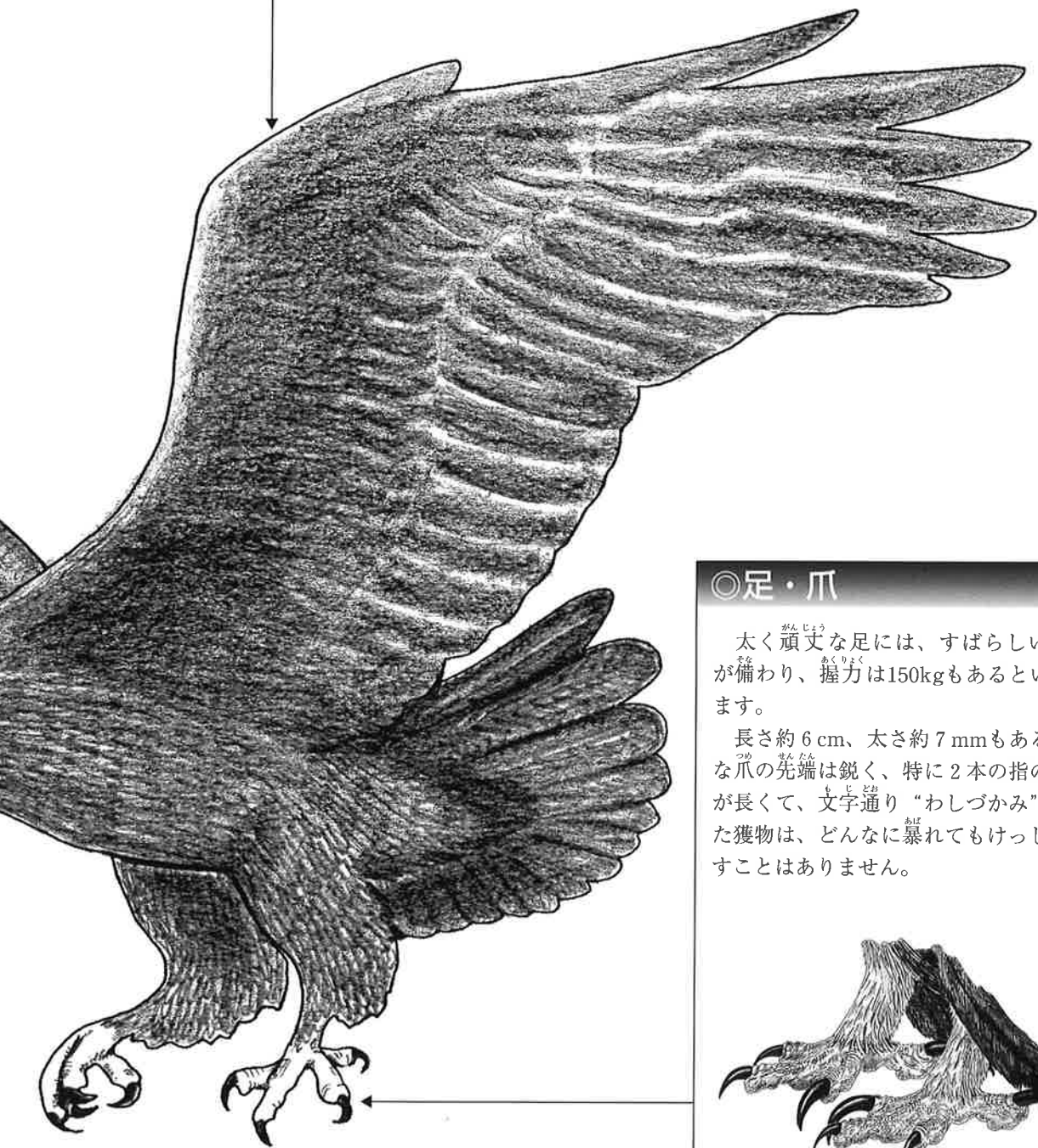
幼鳥の羽色は成鳥よりも黒みが強く、また飛んでいる時には、翼と尾羽に白い部分が目立つので見分けられます。成鳥の目はオレンジ色ですが、幼鳥の目は茶色です。



## ◎翼

大きな翼で風をとらえ、グライダーのように滑空します。1000m以上の上空を飛ぶこともあり、獲物を見つくと翼をすぼめ、地上へと急降下します。

幅が広く長い翼は、広い空間を飛ぶことに適していますが、逆に、森林の木々の間をぬっての飛行は得意ではありません。



## ◎足・爪

太く頑丈な足には、すばらしい筋力が備わり、握力は150kgもあるといわれます。

長さ約6cm、太さ約7mmもある大きな爪の先端は鋭く、特に2本の指のツメが長くて、文字通り“わしづかみ”にした獲物は、どんなに暴れてもけっして放すことはありません。





# ニホンイヌワシの食性

ニホンイヌワシは何を食べてくらししているのでしょうか？肉食性であるのは確かですが、深い山の中に広い行動圏を持ってくらすイヌワシが獲物を捕らえるところに出くわすのは滅多にあることではないので、その詳しい食性を知るのにはなかなか容易ではありません。ところがイヌワシの生態についてよく知り、絶滅の危機から救おうとする時、その食性をよく知ることは不可欠です。

調べる方法としてひとつにはペリットの分析があります。猛禽類は消化できないもの、つまり食べた動物の毛や羽、骨を一塊にしてペリットとして吐き出しますが、例えばねぐらや営巣後の巣の近くからこっそり回収して分析すると、何を食べているのかがわかります。

それだけではなかなか食べる量まではわかりませんが、もうひとつのより優れた方法は、営巣中の巣の中が見えるようにカメラを設置し、親鳥が雛に餌を運ぶところを録画するのです。この方法では餌の種類他にある程度の量まで推定できます。こうした方法と直接の自視観察を組み合わせた研究の結果、これまでにわかったおもに営巣中のイヌワシの食性について見てみます。

## 「ノウサギが重要な餌」

日本イヌワシ研究会が6地域で数年間調査した結果、種名までわかったイヌワシの食物は哺乳類10種、鳥類7種、爬虫類5種のあわせて22種でした<sup>1)</sup>(表1)。これ以外では同じ猛禽のトビ、ニホンイノシシの幼獣、ニホンジカの死体などを食べたという報告があります<sup>2)3)</sup>。イギリスでもアカシカやヒツジの死体が冬の大切な食物になっているという報告があり、死肉食は当たり前に見られることのようにです<sup>4)</sup>。これらの研究も含め最近まとめられた希少猛禽類調査報告書<sup>5)</sup>ではイヌワシの餌のうち種名までわかっているもので哺乳類15種、鳥類17種、爬虫類5種があげられています。

さてそのうち最も食べることが多いイヌワシの主要な餌は何でしょうか。岩手県北上高地では育雛中の親が雛に餌を運ぶのが68日間で60回観察されましたが、そのうちで最も多かったのはノウサギで25回、全体の41.7%におよんでいました<sup>6)</sup>。次いでヘビ類が17回(28.3%)、ヤマドリが16回(26.7%)と多く食べられていました。

秋田県駒ヶ岳の2年間にわたる調査結果において、調査1年目(雛は巣立ち前に死亡)の育雛期、83日間で33回の餌の搬入が観察されましたが<sup>7)</sup>、ノウサギが全体の23回(69.7%)と最も多く、次いでヘビ類が3回(9%)でした。2年目において、雛が巣立つまでの67日間で40回の餌の搬入が観察されましたが、ノウサギが37回、全体の92.5%とほとんどを占め、ヘビ類は2回(5%)だけでした。

このように全般的にイヌワシの餌として最も重要なのがノウサギで、次がヘビ、あるいはヤマドリという順番が普通のようなようです。

さらに、運び込んだ回数だけではなく餌の重量も考えあわせると、ノウサギの重要性がますます際立ちます。北上高地の調査で餌が完全な形で巣に運ばれると仮定し、その推定重量(表2)

を用いて比較したところ、81回巣に搬入された餌のうち、ヘビ類が34回(42.0%)、ノウサギが33回(40.7%)と回数ではほぼ同じでしたが、重量で比較すると推定の総重量の86kgのうちノウサギは約69kgあり、全体の80.4%を占めると推定されました<sup>8)</sup>。つまりノウサギは捕獲回数が多いばかりではなく、1回の捕獲で得られる食物量が他よりはるかに多いという点でとても効率のいい餌といえます。

繁殖の成功にはある程度以上の重量の餌が不可欠です。先に述べた駒ヶ岳の例で、繁殖に失敗した1年目には巣に搬入された餌の推定総重量は60.8kgであったのに対し、成功した2年目では89.8kgであったことがわかっています<sup>7)</sup>。ノウサギの多少が繁殖の成否にも影響するのは間違いないでしょう。

ただし食性には季節的な変化が見られており、木の葉が生い茂る時期にはノウサギやヤマドリの発見率が下がるためか、捕れる事が少なくなるようであり、またヘビにおいて気温の上下で行動量に変化することから、暖かい時期に多く利用されます<sup>6)10)</sup>。

さて、国外のイヌワシの食性についてWatsonがまとめています。それによるとイギリスではライチョウやノウサギ、アナウサギを中心にヒツジやアカシカの幼獣および死肉、カモメなどを食べており、アメリカではノウサギやアナウサギ、マーモット、ジリスを中心

種名	例数
ノウサギ	479
テング	12
キツネ	7
ニホンイタチ	6
ニホンカモシカ	5
ホンドアカネズミ	4
アナグマ	3
ニホンリス	2
タヌキ	1
トウホクヤチネズミ	1
種不明哺乳類	2
哺乳類合計	522
ヤマドリ	161
ヤマネ	9
キジバト	5
ハシボソガラ	2
ツグミ	2
カケス	1
アオバト	1
種不明鳥類	35
鳥類合計	216
アオダイショウ	152
アシウビ	21
シマヘビ	3
ジムグリ	3
マムシ	2
ヤマカガシ	1
種不明ヘビ類	87
爬虫類合計	266
種不明(肉塊)	22
合計	1026

表1 育雛期の餌  
日本イヌワシ研究会(1984)より(一部改訂)

種類	体重(g)	標本数	産地	出展
ノウサギ(成獣)	2,338	14	岩手県	関山(未発表)
(幼獣)	373	5	岩手県	関山(未発表)
アオダイショウ	310	7	岩手県	青山(未発表)
キジ・ヤマドリ	992	?	?	岩手県環境保健部自然保護課(1978)
カケス	135	?	?	岩手県環境保健部自然保護課(1978)
アカネズミ	40	?	岩手県	鈴木(私信)
リ	283	7	千葉県	今泉(1960)

表2 餌動物の平均体重  
青山ら(1988)より(一部改訂)

にライチョウやキジなどを食べています<sup>9)</sup>。地域差があり、またヴァリエーティもあるようですが、Watsonはいつも決まった種を決まった行動パターンで専門的に効率よく捕獲できるのが良い状態で、繁殖成功率が高まりますが、逆にその餌動物が不足すると何でも食べようとするものの効率が悪くなり、繁殖成功率が下がる<sup>9)</sup>と述べています。

日本でもノウサギが不足すると例えば同じ猛禽のフクロウやノスリまで食べたという例もあり<sup>9)</sup>、あるものを何でも食べるという融通も利くようですが、そのような状況では繁殖がうまくいかないようです。ノウサギが捕らえづらくなった分が他の動物で補われることが理想的といえるでしょう。

餌捕獲の行動について見てみましょう。

## 「獲物を捕まえる行動」

イヌワシが獲物を捕らえる行動にはいくつかのパターンがあるようです。日本イヌワシ研究会・日本自然保護協会は駒ヶ岳で2年間イヌワシの狩りの行動を調査した結果、餌動物を探す行動、見つけた場合に捕まえようとする行動が113例観察され、9つのパターンに分けられました<sup>10)</sup>。(図1,表3)。これらの行動は連続して行われることもありましたが、餌動物を探す行動は飛行しながら餌動物を探す方法(①②③⑥)と、止まり木に止まって餌動物を探す方法(⑧⑨)の大きく2つに分けることができ、捕獲行動には飛行中の上空や止まっている木の上から急降下し、獲物がある場所に飛び込んで捕まえる方法(④)と空中で飛行中のトビなどを襲う方法(⑦)がありました。またオスとメスが協力して餌動物を隠れ場所から追い出し捕まえる方法(⑤)も見られました。このオスメス協同しての方法は単独で行うより成功率が低く、狩りがしにくいところに動物が隠れている場合などに使われるようです。この調査で捕らえようとする動物種まで特定できたのは18例ありましたが、実際に捕獲できたのはそのうち5例だけで(表4)、Collopyのアメリカでの報告からもイヌワシといえど狩りの成功率はさほど高くないのかもしれませんが<sup>9)</sup>。

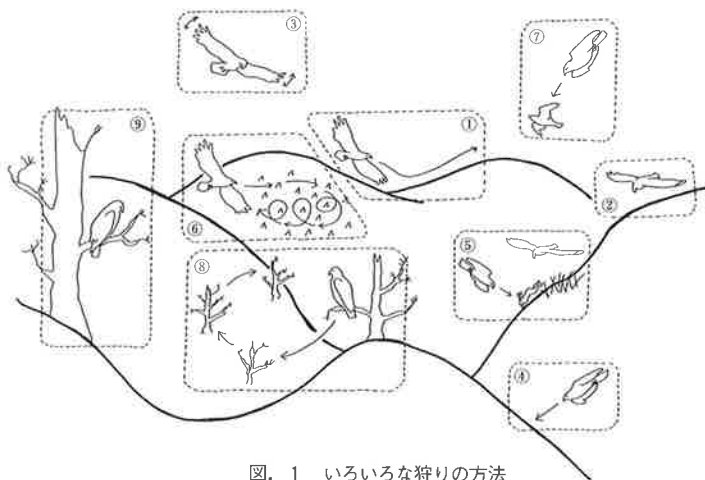


図. 1 いろいろな狩りの方法  
日本イヌワシ研究会・日本自然保護協会 (1994) より (一部改訂)

行動型	例数	(%)
① 斜面のごく上を、斜面に沿うように飛行する	39	(25)
② 低空を下を見ながら飛ぶ	25	(16)
③ 停飛(ホバリング)	24	(16)
④ 斜面に急降下して突っ込む(前後の行動から総合的に判断する)	26	(17)
⑤ 追い出し行動	4	(3)
⑥ 特定の場所を何度も巡回する(前後の行動から総合的に判断する)	8	(5)
⑦ 空中で直接狩りを行う(獲物を確認できた場合に限り)	13	(8)
⑧ 短時間で定期的な止まり木を変える	4	(3)
⑨ 止まり木から地上を注視する(自視方向で判断する)	11	(7)

\*一連の捕食行動で複数の行動型が見られた場合は、それぞれの行動型に例数を含めた。

表. 3 狩りの方法ごとの観察例数  
日本イヌワシ研究会・日本自然保護協会 (1994) より (一部改訂)

さて、長野県での調査でも多く観察されたのは斜面すれすれ、あるいは少し上空を飛行して餌動物を探し、見つけると動物がいる場所に降下して捕まえようとする行動で<sup>11)</sup>、これがイヌワシの獲物を捕らえる基本的な行動パターンなのかもしれません。このことを考えあわせてもイヌワシが効率よく餌動物を捕らえるには上方から見つけやすいことが前提条件となるようで、草地や伐採跡地などのように開けた場所や冬季の葉の落ちた落葉広葉樹林などが好適な場所といえます。逆に年中樹冠が埋めつくされている植林地は、そもそも飛行が困難なことからあわせ、狩りがしづらい場所といえます<sup>10) 12)</sup>。

木々の間に適度な隙間がある落葉広葉樹林では林床に十分な日が当たるため下草が繁茂するので、その下草を餌とし、また隠れ場所とするノウサギにとってよい生息場所となり、ノウサギの密度が高くなります。たくさんのノウサギがいる林があり、そこに隣接して上空から獲物が見つけやすい草原や伐採跡地などの開けた場所がある、食性の面から見てイヌワシが生息しやすいのはそのような場所といえるでしょう。

次の章ではイヌワシの繁殖生態から、必要な環境を考えましょう。

年月日	捕食対象	備考
1991. 4. 6	ホンドタヌキ	急降下で攻撃する(失敗)
1991. 9. 23	トビ	空中で攻撃(失敗)
1992. 5. 4	ノウサギ	捕獲成功
1992. 11. 22	種不明ハト	空中で攻撃(失敗)
1993. 3. 28	ヤマドリ(♂)	急降下で攻撃する(失敗)
1993. 5. 9	ノウサギ	捕獲成功し巣へ搬入
1993. 5. 29	種不明ヘビ	捕獲成功し巣へ搬入
1993. 6. 12	キジ(♂)	急降下攻撃し捕獲成功
1993. 7. 30	トビ	空中で攻撃(失敗)
1993. 7. 30	トビ	空中で攻撃(失敗)
1993. 7. 30	トビ	空中で攻撃(失敗)
1993. 7. 30	トビ	空中で攻撃(失敗)
1993. 7. 30	トビ	空中で攻撃(失敗)
1993. 7. 30	トビ	空中で攻撃(失敗)
1993. 7. 30	トビ	空中で攻撃(失敗)
1993. 7. 30	トビ	空中で攻撃(失敗)
1993. 7. 30	トビ	空中で攻撃(失敗)
1993. 7. 30	トビ(幼鳥)	空中で攻撃し捕獲成功

表. 4 対象動物が確認できた捕食行動  
日本イヌワシ研究会・日本自然保護協会 (1994) より (一部改訂)



# つがいの関係と子育て

ここでは、ニホンイヌワシの繁殖について、季節ごとの経過に沿って紹介します。

## 繁殖シーズンの始まり

10～11月頃、それまで別々に行動圏内の離れたところにある木をねぐらに使っていたオス、メスのつがいは、徐々にそれぞれの行動範囲を狭め、巣をかけようとする場所の近くで一緒に過ごすようになります<sup>5) 11) 13)</sup>。

イヌワシが巣をかける場所として選ぶことが多いのは、外敵が近づけないような谷間の切り立った崖の上のほうにある岩棚で、雨や雪が避けられるよう岩棚の上部の壁が棚の上にせり出しているようなところが好まれ、時には岩にあいた横穴が使われることもあります<sup>9)</sup>。冬の雪や寒さが厳しい北のほうの地域では、冬の季節風が直接当たらない、南向きの日当たりの良い場所が多く選ばれます<sup>4) 14)</sup>。巣をかける場所の標高は地域によって多少の違いがありますが、平均すると行動圏内の標高の真ん中あたりからそれより下に造ることが多いようで<sup>5)</sup>、これは捕獲した大きな獲物をつかんで飛び、巣まで持ち返るのに、山の上に運び上げるよりも運び下りることを多くするためのようです<sup>4)</sup>。条件の良い崖がない場合は急斜面にあるアカマツなどの大木の上に巣を造ることもあります<sup>9)</sup>。

普通イヌワシのつがいは行動圏内の2～3箇所に巣をかける候補となる場所を持っていて、その中で条件のかなう場所を選んで使いますが<sup>4)</sup>、近年では環境の変化や開発により、イヌワシが安心して巣を造れる場所が少なくなってきています<sup>5)</sup>。

その頃、つがいは巣をかけようとする場所の周辺で連れだって、変わった飛び方をするが多くなります<sup>5) 15)</sup>。飛び方には図.1のように並列飛行、脚をからませる飛行、波状飛行などがあり、オス、メスの両方に見られます<sup>15)</sup>。これらは求愛のディスプレイのための飛行であるといわれ、営巣を前につがいの絆を強める働きがあるといわれます<sup>4)</sup>。さらに、この頃から自分たちの行動圏に侵入してくる他の猛禽類や近くに行動圏を持つ別のイヌワシの個体を行動圏の境界付近から追い払うようになります<sup>4) 8) 11)</sup>。

## 巣作り

12～1月頃になると、巣作りが始まります<sup>13)</sup>。巣作りはオス、メス協同で行われ、始めのうちは巣の基部に使うアカマツなどの大きな枝を選びます<sup>4) 8)</sup>。巣は直径1～2 mと巨大なものも多く、環境が大きく変わらなければ、補修を繰り返しながら同じ巣を何年何十年と使い続けるため、年々巣材の枝が厚く積み重ねられることになり、時には巣の基部の厚さが1 mを超えることもあります<sup>4) 5) 15)</sup>。基部ができあがり産卵の1ヶ月くらい前になると、産座の材料としてススキなどの草や、やわらかい木の皮などが選ばれます<sup>8)</sup>。巣内ではオス、メス協力しあって巣作りし、巣材の受け渡しをしたり、大きな枝などは2羽でくわえて動かしますが、産座はおもにメスが造ります<sup>8)</sup>。

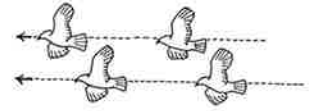
この頃から狩りをする範囲が狭くなり、巣から近い場所だけを利用する傾向になることがわかっていて<sup>5)</sup>、秋田県駒ヶ岳の詳しい調査では巣から4 km以内に行動が限られるようになり、特に2 km以内の近い場所をよく利用することがわかりました<sup>10)</sup>。

## 交尾と産卵

交尾は早くて産卵の46日前、ちょうど巣作りが始まる頃から始まり、巣の近くの木や岩場で繰り返行われます<sup>8)</sup>。遅くて産卵55日後にも交尾が見られることから、交尾のすべてが受精に関係しているわけではなく、お互いの結びつきを強める役割もあると思われます<sup>4)</sup>。

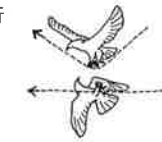
産卵が近づくとメスは徐々に巣の中にいる時間が長くなり、それまでは夜間も巣の外で寝ていたのが産卵数日前からは巣の中で寝るようになり、オスも巣の近くで寝るようになります<sup>5)</sup>。産卵は2月上旬頃から始まりますが、年によって多少時期は前後し、さらに地域差があります<sup>4) 13)</sup>。全般に寒くて雪が多いと遅れがちになるようで、2月の平均気温が低いと遅れるという報告もあります<sup>4)</sup>。

a) 並列飛行



つがいがびったりと寄り添って飛ぶ

b) 脚をからませる飛行



どちらかが急降下してもう1羽に接近し、接近された方が反転し互いの脚をからめあう

c) 波状飛行



高いところまで急上昇したあとに、翼を閉じて急降下し、そのスピードを利用して一気に上昇し、何度も繰り返す

図. 1 イヌワシの3つのタイプの求愛ディスプレイ



日本での産卵数は普通一腹2卵で、1卵のこともあります<sup>9)</sup>。アメリカでは餌が豊富な時に3卵産むこともあります<sup>4)</sup>。産卵を控えた時期に十分に栄養を蓄えることができれば、産卵できないこともあるようです<sup>4)</sup>。

親鳥は1卵目を産むとすぐに抱卵に入り、4～5日後に次の卵を産みます<sup>9)</sup>。大きさは長径約65～75mm、短径約52～57mmの長円形で、重さは約77～109g、普通白地ですが中には褐色の斑点があるものもあります<sup>9)</sup>。抱卵日数は40～45日で、抱卵はおもにメスが行います<sup>9)</sup>。オスも時々交代しますが、巣の近くで狩りをしてメスに餌を運んだり、巣の付近にいて周囲を警戒していることが多いようです<sup>8) 11)</sup>。

## 孵化と子育て

卵は3月中旬～下旬に孵化します<sup>13) 16)</sup>。抱卵開始が数日ずれることから、2個の卵は孵化もその分間をおいて起こります。孵化時の雛の体重は100g前後ですが<sup>4)</sup>、早く孵化した雛はすぐに成長が始まり、2番目の雛が孵化する頃、先に孵化した雛はすでに一回り大きくなっており、後から孵化した雛をつついて攻撃します<sup>4) 10) 13) 16)</sup>。この兄弟間闘争は他の大型の猛禽類、例えばチュウヒやフクロウでも見られますが、イヌワシでは必ず見られます<sup>4)</sup>。攻撃は孵化後2週間くらいまでが最も激しく、小さい方の雛のほとんどは弱って死んでしまいます<sup>4) 13)</sup>。死んだ雛は、それすらも栄養にするために親が食べてしまうか、生き残った雛に与えてしまうことさえあります<sup>13)</sup>。食物が豊富な時、まれに雛が2羽とも育つことはありますが、無精卵や抱卵の失敗という他の要因からも、結局国内ではうまくいっても1羽の雛しか育たないことがほとんどです<sup>13)</sup>。

アメリカでは餌が豊富な時、兄弟間闘争があっても、雛が2羽とも育つ例が比較的普通に見られます<sup>10) 15)</sup>。それどころか、アイダホ州ではジャックウサギの個体数がピークになった翌年に、高い頻度で1つの巣から3羽の雛の巣立ちが起こったことが報告されています<sup>4)</sup>。餌が不足することのない日本国内の動物園では、イヌワシが餌不足に陥ることがないことによってか1つのつがいから2年連続で2羽の雛が巣立った例があります<sup>17)</sup>。これらのことから雛が育つかどうかには餌の豊富さが強く関わっていることがわかります。

兄弟間闘争は食物の条件により少なくとも1羽は雛を巣立たせようとするイヌワシの繁殖戦略であると考えられます<sup>10)</sup>。

孵化後の雛は初めは無力で立つこともできず親に抱かれています。細かくちぎった餌を口移しに与えられて成長します<sup>13)</sup>。その体重は図.2のように10日目頃から急激に増加し、30日目くらいからまたゆっくりになるという、S字カーブを描きます<sup>4)</sup>。イヌワシの成鳥はオスよりもメスのほうが体が一回り大きいのですが、雛も45～50日齢の時点でオスよりメスで体重が500～600g重くなります<sup>4)</sup>。

羽色は最初、図.3のように全身白い羽毛に覆われていますが、生後30日目頃から黒い羽毛が混じるようになり、それが徐々に増えるので、大まかな成長の目安になります<sup>4) 13) 15)</sup>。この黒い羽が混じる頃から自分でも餌をついばめるようになり、雛の食べる量がどんどん増えるのにあわせてメスも狩りに出るようになります<sup>10) 11) 13)</sup>。また、狩りをする範囲も巣から4～6kmとそれまでより少し広がりますが、まだ巣により近いところで狩りをする人が多いようです<sup>10) 11)</sup>。

その後雛は置いておかれる餌を自分で引き裂いてどんどん食べるようになり、オスもますます餌を運ぶのが大変になります<sup>4)</sup>。巣立ちが近くなる頃には黒い羽毛が生えそろう、脚まで羽に覆われるようになります<sup>15)</sup>。雛は羽ばたきの練習を繰り返し、だんだん落ち着かなくなってきました<sup>13) 15)</sup>。

巣立ちは孵化後70～80日頃に起こります<sup>4) 15)</sup>。図.4のように巣立ち前には親の餌を運び込む量が減りますが、これは意図的に雛を空腹にさせて巣立ちを促すのかもしれませんが<sup>4)</sup>。

また、この時期に特徴的なこととして、おもにメスが巣の中に

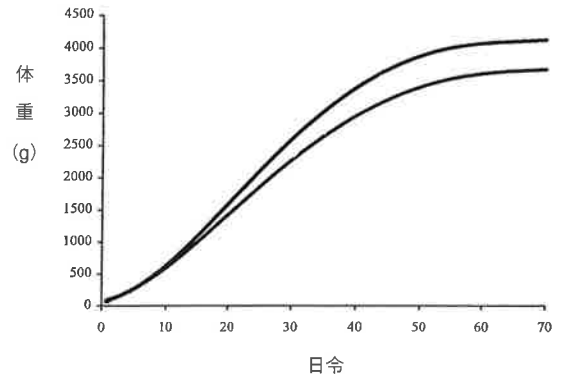


図. 2 オス(下)とメス(上)の雛の成長曲線  
Watson (1997) より (一部改訂)

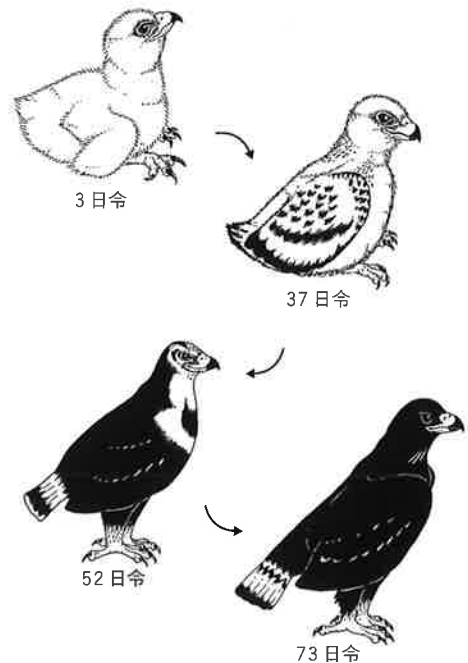


図. 3 幼鳥の羽色変化 中条正英ら (1983) より (一部改訂)

青葉のついたアカマツなどの枝を運び込みます<sup>4) 8) 11)</sup>。その理由ははっきりとはわかっていませんが、テリトリーの誇示や、餌の食べかすを隠す、また青葉に含まれる物質で外部寄生虫の増加を抑える、といった働きがあると考えられています<sup>4) 8)</sup>。

## 幼鳥の独立

巣立った幼鳥はまだ短い距離しか飛行できず、近くの木や岩棚と巣との間を行き来するなど、しばらくの間狭い範囲で行動しながら親の給餌を受けます<sup>4) 11)</sup>。3ヵ月後の8～9月頃には親と同じくらいの高度まで飛べるようになり、約10km離れたところまででも親と一緒に狩りに出かけることができるようになります<sup>10) 11) 13)</sup>。親の行動範囲も幼鳥の成長にあわせて徐々に広がり、巣の近くでの狩りが減って6km以上離れたところで狩りをするが多くなります<sup>10) 11)</sup>。その後、幼鳥はさらに飛行能力を増し、9～10月には親鳥と同じくらいまで行動範囲を広げ、親の狩りの仕方を見習って失敗を繰り返しながら少しずつ実際に餌を捕れるようになります<sup>4) 13) 16)</sup>。

10～11月、親が次の繁殖期を始めようとする頃、幼鳥の親離れが起こります。時に攻撃すら受けながら幼鳥は親に追い払われ、ついに親の行動圏から出て独立することになるのです<sup>13)</sup>。

しかしすべての幼鳥がそのようにすんなりと独立できるわけではなく、飛行や狩りが未熟なために飢えたり怪我をして保護される幼鳥が県内でも多く見られ、さらに死亡してしまう個体も少なくありません<sup>10) 13)</sup>。巣立った幼鳥のうち約75%が、成鳥になるまでに死亡するという報告もあります<sup>4)</sup>。また国内において、親の繁殖スケジュールも多くのつがい毎で毎年続けてというようにはなかなかいかず、1～2年間隔をあけてから次の繁殖にかかることも多いようで、独立がうまくできずに1年以上も親と一緒にくらしている幼鳥の例が最近増えてきているという報告もあります<sup>15) 16)</sup>。

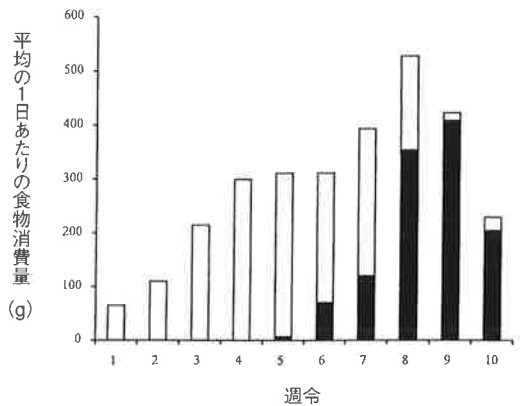


図. 4 週ごとの成長段階におけるイヌワシの巣内雛の1羽、1日あたりの平均食物消費量と、母親による給餌(白)および雛自身による採食(黒)の比較 Watson (1997) より (一部改訂)

識別のタイプ	確認された場所と巣場所との間の距離(km)				合計
	<100	100-300	300-1000	>1000	
足環回収の個体数(%)	41(77)	10(19)	2(4)	0(-)	53
翼のマークで確認した個体数(%)	114(77)	18(12)	14(10)	1(1)	147
合計					200

表. 1 イヌワシが足環の回収および翼のマーキングの観察により確認された場所の、巣場所からの距離 Watson (1997) より (一部改訂)

幼鳥が独立してから性成熟して、自身の繁殖にかかるまでの行動は国内ではよくわかっていません<sup>10)</sup>。国外で見ると、北緯65度以上の高緯度地域にすむイヌワシは、成鳥が繁殖地と越冬地の長距離間で渡りをしますが、それ以外の地域では一度繁殖テリトリーを獲得すればそこに定住し、その後長距離を移動することはありません<sup>4)</sup>。しかし、国外における幼鳥の移動についての研究を見てみると餌が豊富なアイダホ州ではほとんどの幼鳥が生まれた地域から100km以内に留まっていたが(表. 1)、一方ヨーロッパでは巣立った場所から1000km以上も放浪した末、繁殖に関わる頃に生まれた地域に戻ってきて、行動圏を保有していた個体の消失に伴ってできた隙間におさまる傾向があることが明らかにされています<sup>4)</sup>。そもそもイヌワシはつがいの絆が強く、場所に執着してしっかり防衛する性質があります。幼鳥が4歳になり成鳥羽が生えて性成熟する頃には、狩りの技術も備わっており、体の大きさも一人前になっていますが、食物が得られやすく安全に巣をかけられる繁殖に適した場所はすでに他のつがいに使われていて、そのような占有権があるより年長の個体から行動圏やつがいの相手をもぎ取るのはとても困難です<sup>4)</sup>。そこで落ち着ききれないままに周囲にいて機会をうかがい、先にいた年長個体が死亡するなどいなくなるとさっとその隙間に入り込み、行動圏やあるいはつがいの相手を獲得する、という方法でしかししっかりと落ち着くことはできないようです<sup>4) 5) 10)</sup>。行動圏を得た後で一度つがいになると、その絆は強く、相手が死亡するなどいなくならない限りその関係はずっと続きます<sup>4) 13)</sup>。

野生の個体の寿命は、個体識別が難しいというえ長期的な調査がなされていないためほとんど明らかになっていませんが、県内では少なくとも20年間生存している個体が確認されています<sup>19)</sup>。国外では30年生きた記録があり、飼育下ではさらに長寿の例も少なくないようです<sup>4)</sup>。しかし平均寿命は、上記の巣立ち後の幼鳥の死亡率がかなり高いことを考えれば、それほど長くないと考えられます<sup>4)</sup>。



# 岩手県で絶滅が心配されるワシタカの仲間

岩手県に分布しているもののその数が減り、ニホンイヌワシと同じように絶滅が心配されているワシタカの仲間を紹介します。

## ・オジロワシ・オオワシ



オジロワシ

両種とも、岩手県内では冬鳥として11月～3月頃に海岸部や河口部で見られ、水鳥や産卵後の死んだサケをおもな食物としています。

オジロワシは、ユーラシア大陸北部に広く生息しますが、繁殖地は限られており、日本では北海道東部と北部で繁殖しています。

一方、オオワシは、カムチャツカ半島からオホーツク海沿岸、サハリン北部で繁殖し、日本へは越冬のために飛来します。

オジロワシ、オオワシともに、営巣に必要な大木が伐採され、個体数が減少しました。

さらに、近年になって散弾銃の弾が体内に残るシカの死体を食べ、鉛中毒で死亡する例がとて多く報告されています。



オオワシ

## ・クマタカ



クマタカ

岩手県内では、一年を通しておもに北上高地、奥羽山脈で見られ、森林に生息する小動物、鳥類、爬虫類を食べています。

体が大きく、たくさん食べる必要があるため、環境の悪化による餌動物の減少の影響を受けやすく、さらに非常に警戒心が強いので営巣には静かな奥深い森林が必要なのですが、森林の伐採による環境の変化や営巣期の巣周辺での人間の活動により個体数が減少しました。

## ・ハヤブサ



ハヤブサ

岩手県全域で一年を通して見られます。特に沿岸地方は国内最大級の繁殖地であり、重要な生息地であるといえます。海岸の崖に営巣し、生息地周辺を通過する渡り鳥をおもな食物としています。

その精悍な姿から、違法な飼育や剥製を目的とした密猟が多く、個体数の減少に拍車をかけています。

岩手県生活環境部自然保護課。2001。いわてレッドデータブック。

環境庁自然保護局野生生物課。1991。日本の絶滅のおそれのある野生動物—レッドデータブック—(脊椎動物編)。日本野生生物研究センター。を参考にしました。



# ニホンイヌワシを守るために

ニホンイヌワシは北海道から九州にかけて現在約650羽が生息しています<sup>21)</sup>。北海道や西日本には少なく、北陸や東北地方に多く生息しており<sup>24)</sup>、岩手県内には70～80羽が生息しています<sup>20)</sup>。盛岡市内にも1つがいが生息し、その営巣地が保護されています<sup>19)</sup>。戦前には全国で約700つがい(1400羽)が生息していたと考えられているので<sup>21)</sup>、その数は急激に減ったといえます。

日本にすむイヌワシ650羽のうち、繁殖可能な成鳥は520羽ほどです<sup>22)</sup>。一般に健全な個体群を維持するためには500以上の個体数が必要であるといわれており、520羽というのは危機感を持つべき、ぎりぎりの数字なのです<sup>22)</sup>。その上、近年では繁殖成功率が下がり、若い個体が補充されにくくなっていることから、国内の繁殖つがいの平均年齢が上がってきており、今後さらに急激に個体数が減少する恐れが出てきています<sup>21) 24)</sup>。

つまりニホンイヌワシは今、絶滅の危機に瀕しているのです。なぜこれほどまでに数が減ってしまったのでしょうか。また、ニホンイヌワシを絶滅させないために、私たちはどうしたらよいのでしょうか。考えてみましょう。

## 『ニホンイヌワシが減少した理由』

ニホンイヌワシが数を減らしてしまった理由を考えてみます。イヌワシはノウサギやヤマドリといった動物を捕食します。図.1を見てください。これは食われるものよりも食うものの絶対数のほうが順に少なくなるという数の関係を説明する食物ピラミッドです。イヌワシはその頂点にある種なので、元々絶対数は多くありませんでした。そのような動物は普通変動の比較的小さい安定した環境をたよりに、長い寿命をもって生息しますが、逆に突発的な環境の激変にすぐに適応したり繁殖力で補ったりするのは困難だといえます。

イヌワシに近年悪い影響を与えた環境の変化とは何だったのでしょうか。ひとつには生息地の減少があげられます。イヌワシは高山に生息するというイメージがありますが、必ずしもそうではなく、日本イヌワシ研究会の調査によるとその行動圏は標高50～2,800mの範囲にあり<sup>23)</sup>、このような都市周辺の山間部ではスキー場やゴルフ場を含むリゾート開発、林道やダムの工事など人間による開発行為が近年さかに行われました<sup>25)</sup>。その開発が本来2,100ha～23,700haという広大な行動圏を持ってくらす<sup>21)</sup>イヌワシの生息できる範囲をどんどん狭めていったといえます。また開発により、繁殖に欠かすことのできない切り立った崖の岩棚や、それに代わるアカマツなどの大木が失われ、そのこともイヌワシの繁殖できないつがいを増やし、生息を阻んだのでしょう。

もうひとつイヌワシを減少させた要因に餌動物の減少があります。開発行為はイヌワシの生息地を狭めるとともに、餌となるノウサギなどの動物も減少させます。餌動物の密度が高ければ行動圏は相対的に狭くてもすみませんが、餌の密度が下がれば必要量の餌を確保するためにより広い行動圏を持たなければなりません。ところが開発により生息地が狭められていけばそれはイヌワシにとって二重の負荷となります。

日本の森林が針葉樹林主体になったことも餌動物を減少させました。日本の国土の2/3は森林ですが、落葉広葉樹林などの自然林はほとんどなくなり、森林の41%がスギやヒノキなどの針葉樹の人工林になっています<sup>22)</sup>。食性の項でも書きましたが、針葉樹林は林床に日が当らず、ノウサギなどの餌動物の生息には適しません。さらに林業経営の衰退により間伐や枝打ちなどの手入れが行き届かず木々の間隔が狭くなり、イヌワシがその中を飛んで餌を捕ることも出来なくなったのです。

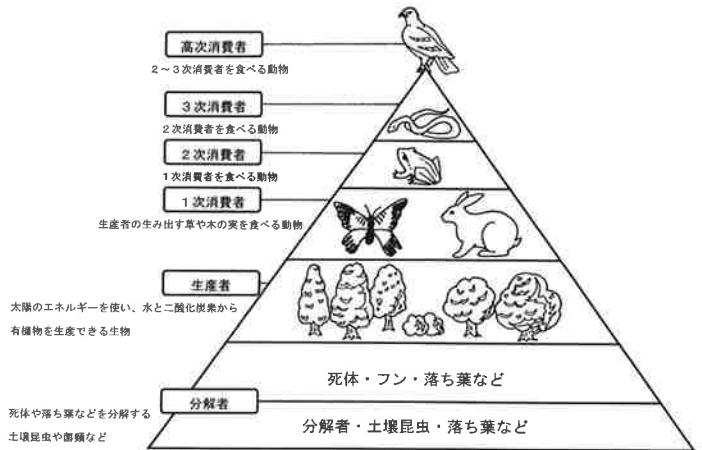


図. 1 食物ピラミッド

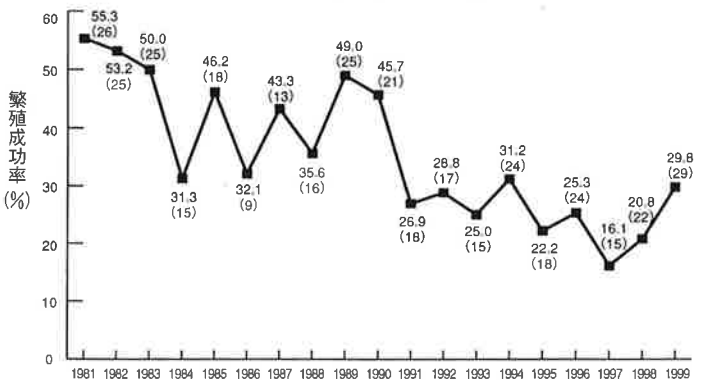


図. 2 繁殖成功率の年変化 (1981～1999)

グラフ上の数字は繁殖成功率 (%) を示し、下の数字はその年の巣立ち雛数を示す。ニホンイヌワシ研究会 (2001) より

ところが開発により生息地が狭められていけばそれはイヌワシにとって二重の負荷となります。

餌の不足は多くの猛禽類でも研究されているとおり、イヌワシにも即座に繁殖率の低下をもたらします。図2は全国のニホンイヌワシの繁殖成功率（1つがいあたり1年に1回の繁殖で1雛が巣立つ割合）の年変化を示しています<sup>26)</sup>。1980年代は40%台を維持していましたが、1990年代には20%台に急激に低下しています<sup>22)</sup>。

繁殖率を低下させる原因としてはまず上に述べた生息環境の悪化、つまり生息地の減少、巣場所の不足、餌の不足があげられます。さらにその他にも繁殖を妨げる要因があげられます。

ひとつは人間の活動により落ち着いて繁殖に取り組めないことです。巣の周辺に釣り人や山菜採り・写真マニアなどが不用意に接近すると、親鳥が用心して餌を探しに行かなかったり、雛の世話が疎かになったりします<sup>27)</sup>。また最悪の場合はその段階で繁殖を中断することもあります。たった1人の行動がイヌワシの繁殖に影響し、失敗を招くことになるのです。

さらに気になるのは化学物質の影響です。ニホンイヌワシではっきりと調べられているわけではありませんが、身の回りにはDDEやPCBsなどの農薬をはじめとして、様々な有害物質が氾濫しています。これらは一度体内に入ると排出されることなく、体内に蓄積されていきます。食物ピラミッドの頂点に立つ猛禽類は有害物質に汚染された餌動物を食べ続けることによってさらに体内に蓄積されていくので有害物質の影響が出やすく、個体自身が死亡したり、マグネシウムとカルシウムのバランスがくずれて卵の殻が薄くなり孵化前に割れてしまう事例が報告されています<sup>28)</sup>。日本のイヌワシでは明確にされていませんが、繁殖成功率低下の原因として疑われています。

繰り返しになりますが、ニホンイヌワシを減少させないためには、ノウサギなどの餌動物が豊富にいる落葉広葉樹林などの自然林が十分な面積が必要です。そこには狩りに適した草原や伐採跡地などの開けた場所があり、巣場所として切り立った崖の岩棚やアカマツなどの大木があること、また落ち着いて繁殖にかかれるような人の生活圏と重ならないような静かな環境であることが大切なのです。

## 『ニホンイヌワシを守るために』

ニホンイヌワシを守るための過去の具体的な事例として、すばらしい判断がなされたことがあります。

秋田県田沢湖畔には1947年以前よりイヌワシのつがいが生息<sup>29)</sup>、長年繁殖しているのが知られていました。そのつがいの行動圏は23,700haで<sup>10)</sup>、その中にはスキー場が3箇所ありましたが、全国でも有数の高い繁殖成功率（1984～1998年、86.7%）を維持しており<sup>20)</sup>、イヌワシにとって餌動物が十分いる比較的良好な環境であるといえます。1989年につがいの営巣地のすぐ近くにスキー場・ゴルフ場・ホテルなどを新たに開発する計画が持ち上がりました<sup>10)</sup>。この計画はつがいに重大な影響を与えると考えられたので、日本自然保護協会などが繁殖の状況や行動圏内部の利用状況を調査しました。その結果、開発される場所はイヌワシが一年中よく利用し、繁殖期の狩りをする場所としても重要であり<sup>31)</sup>、このまま計画が実行されれば繁殖に影響するだけでなくイヌワシが暮らしていくことも困難になることを明らかにしました。それを根拠にねばり強い議論を続けた結果、1994年2月18日にイヌワシに悪影響を与える地域での開発計画が中止となったのです<sup>32)</sup>。こうして生息環境が守られ、この場所では今もイヌワシが生息し、繁殖を続けています。

## 『動物園でできること』

日本国内の動物園では2004年12月31日現在5園で29羽（オス17羽・メス12羽）のニホンイヌワシが飼育されています<sup>33)</sup>。それらの個体の年齢、性別、出生地、他個体との血縁関係などはわかる限り登録管理されており、動物園間で計画的に個体をやり取りしながらつがいを作り、繁殖に取り組んでいます。

イヌワシを飼育しながら得られるデータはとても貴重です。野生個体にはなかなか近づくことはできず、まして捕獲はとても困難なので、例えば雛の成長の様子など繁殖に関わること、必要な食料量、栄養状態の見極め方、心配される病気など、飼育下だからこそわかることがたくさんあります。

野生個体の研究者とも連携し、情報をやり取りしながら生態の解明に取り組んでいるのです。

さらに野生では餌不足と兄弟間闘争によりほとんど育つことのない巣の中の「2番目の雛」を親の繁殖を妨げないように取り上げてきて、動物園で育て上げる試みも行われています<sup>34)</sup>。

こうして飼育下で増えたイヌワシは、より多くの動物園で研究と繁殖が行えるよう、各地に分散させるほか、将来野生のイヌワシでつがいの片方が死亡するなど欠けて、その後なかなか補充されないようなところが出たときに利用することが考えられています。

盛岡市動物公園では東京都多摩動物公園で生まれたオスの『出羽』と秋田市大森山動物園で生まれたメスの『空』の2羽を、繁殖と研究を目的に借り受け、2004年の春から展示を開始しました。どちらも長い年月の努力と研究の結果やっと繁殖した大切な個体です。当園も絶滅が危惧されるイヌワシを守るために、とても大事な役目を負ったわけですが、先輩の動物園に教わりながら近い将来何とか『出羽』と『空』を繁殖させたいものです。それと同時に多くの方に動物公園で実際にイヌワシを見ていただきながらできるだけたくさんの解説をし、ニホンイヌワシの現状と保護の必要性を皆さんに理解していただけるよう努力したいと思います。



# どうぶつこうえんうらばなし

## 『笑い!?カワセミ』

動物公園では平成16年の春から2羽のワライカワセミを飼育しています。童謡「わらいかわせみに話すなよ」でも知られるように、人の笑い声によく似た声で鳴くことから名前がついた鳥です。もちろんその声は何かがおかしくて笑っているわけではなく、家族でグループを作ってくらしているワライカワセミがなわばりを確認したり、お互いのコミュニケーションのために鳴き交わしているのです。動物公園では聞きなれない変わった音に反応して鳴き始めることもよくあります。

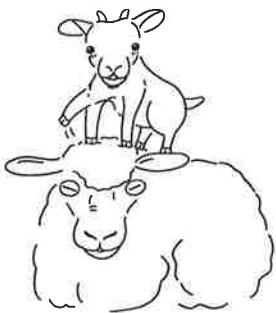
ある日、餌のドジョウを与えようと部屋の中に入った途端、いつもの慣れた作業なのになぜかその日に限っておもいきり扉の角に頭をぶつけてしまいました。「ゴーン」とものすごい音が部屋中と私の頭の中で響き渡り、あまりの衝撃にうずくまっていると、どこからともなく人の笑い声が……。ふと見上げると、それは人の声ではなく、今まで聞いたことのない大きな音に反応したのか2羽のワライカワセミが並んでこっちを見ながら鳴いていたのです。その声はだんだんと大きくなるばかりで、笑っているのではなくただの鳴き声なんだとわかってはいても、状況が状況なだけに、まるで「ばっかだなー」とあざ笑っているかのように聞こえてしまい、なんだかととても悔しくなりました。思わず「笑うなよー」といいそうでした。

その特徴のある声をぜひ聞いてみたい方は、一度ワライカワセミの前で大きな声で笑ってみてください。その声に反応して鳴き始めるかもしれないかもしれません。でもそれで鳴き返してくれないときはただの変わった人になってしまうので、気をつけてください。どうしても鳴き声が聞きたいからといって、その辺にわざと頭をぶつけて音を立ててみるのはやめた方がいいかと思います、くれぐれも。



## 『子ヤギとヒツジは仲良し!?』

子供動物園にあるヤギ広場にはヤギとヒツジがいつも一緒にいます。そこに今年は5頭の子ヤギが生まれました。とても元気な子ヤギたち、お天気の日にはいつも広場の中を走り回っています。子ヤギたちは高い所が大好きでいろいろな所に登りたがるのですが、一番のお気に入りは何といても座って休むヒツジたちの背中の上です。登ってバランスをとってみたり、飛び跳ねたり、時にはとなりのヒツジの背中にジャンプして飛び移ったりします。そんな様子を見てお客さんの子供たちは「ヤギさんとヒツジさんたち、仲良しだねー」と言っています。



ところが子ヤギたち、ヒツジの背中に別な利用法を見つけました。時々ヒツジの背中を踏み台に利用して、広場の柵を飛び越え、外に出てしまうのには少し困るのですが、寝小屋に戻って餌を食べるとき、少し高いところに用意してある乾草を、座って反芻するヒツジの上ののって食べるのです。

さて、こんな事がいつまで続くのでしょうか？踏みつけられてばかりいるヒツジたちはそれでいいのでしょうか？子供のすることだからと大目に見ているのか、それとも賢い子ヤギたちにただ利用されているだけなのか。決して怒ることのないヒツジたちですが、なんとなく困った顔をしているように見えるのは私の気のせいでしょうか。

## 『ライオンの雪玉作り』

ある冬の日の夕方、ライオンを寝小屋にしまい掃除しようと放飼場に回ったときでした。突然、放飼場の真ん中に直径30cmほどの丸い雪の玉が

あったのです。しばし考え、

「はっは～ん。あいつのいたずらだな？」と真っ先に頭に浮かんだのは日頃からいたずら好きの同僚、Sの顔でした。早速つかまえ、

「おいこらっ！お前ライオンの放飼場に雪玉入れたらろっ」と聞くとSはとほけた顔で

「俺知らないよ～。ライオンが自分で作ったんじゃないの～」とのたまいました。

「ライオンがどうやってあの手足で雪を丸めるんだよ？そんなことでできてたまるかよ！ばか！あほ！まぬけ！すつとこどっこい！」と罵詈雑言を浴びせかけました。ところがね、びっくり。できたんです、ライオンにそんなことが。

次の日のことです。荷気なくライオンの放飼場を見に行くと……。自分の目が信じられませんでした。なんと、ライオンのナナエちゃん(当時1歳半)が昨日の雪の玉をえっちらおっちら、両前足でひっぱりながら転がしているではありませんか！それは転がすたびに大きくなって、もはや直径50cmくらいになっています。時々、寄って来る双子の姉妹のナナコちゃんとその雪玉をとりあいながら遊んでいるのです。あわててビデオカメラをとってきて撮影しましたが、その日の夕方にはさらに直径80cmほどまでに“成長”していました。次の日には直径30cmほどの雪玉をさらにもうひとつ作りましたが、それでもうあきてしまったのか、それっきり二度と作りませんでした。その光景を生で見たのは私だけだったので本当にラッキーでしたね。みんなにビデオを見せながら、実際はどういう風にしていたのか一生懸命説明してしまいました。

さて、ビデオはうまい具合に撮影できていたのでテレビ局に知らせたところこれが大うけで、全国版で取り上げられ、番組の中で司会者はじめみんなに大喜びされました。もちろん職員一同大喜びです。

ところで一体どうして雪玉なんか作る気になったのでしょうか？後日雪玉をこわしてみたら、その中心には10cm×20cmほどの石が入っていました。石にじゃれついて遊んでいるうちにたまたま雪がくっつき、面白くなって続けているうちにどんどん大きくなったんですね。

Sにはあらぬ疑いをかけて申しわけなかったです。あやまってはいませんが。



## 『子供動物園の中心で愛をさげぶ』

子供動物園にあるウサギとヒヨコのだっこのコーナーは子供たちに大人気。みんな楽しみにしてやってきてく

れます。飼育係が付き添い、1人ずつに手渡しでだっこしてもらおうのですが、あまり混み合っていない日に、だっこしている子供たちとゆっくり話をするのがとても楽しみです。

ある平日の昼下がり、お父さんに連れられて3歳くらいの男の子がやってきました。にこにこしながらだっこをしていたので、いつものように「ウサギさんあたたかい？」「かわいい？」と問いかけてみましたが、ウサギをだきしめながらただ微笑むだけで何もしゃべってくれません。無反応なのを気にしたのか、お父さんが写真をとりながら同じことを聞いてもじっとウサギをだきしめるだけなのです。恥ずかしがりやさんなのかなと思っているとしばらくして突然、だいているウサギに向かって「愛してやるよー」と大きな声でさげびました。あまりの唐突さに、また真に迫った心からのさげびに、びっくりしてその後大笑してしまいましたが、お父さんはただただ絶句。まさに「世界の中心で愛をさげぶ」ならぬ「子供動物園の中心で愛をさげぶ、ウサギに」。今年一番の楽しい思い出となりました。





## キバナイカリソウ（メギ科）

近畿以北の林に生える多年草で、高さは30～60cmになります。園内では四季の森の散策路で見られ、4～5月に花を咲かせます。

花の形が4つに尖った十字状になっており、昔の舟のいかりに似ていたためイカリソウと呼ばれ、花の色とあわせてこの名がついたようです。天日で干した葉を煎じて飲むと体を温めたり、気力、体力の減退を回復させる効果があるとされ、生薬名「淫羊藿（いんようかく）」と呼ばれる薬草として、利用されています。

また、山菜としても重宝され、県内では方言でオトコトリアシ、カンザシグサ、サンショクソウなどとも呼ばれます。

花の形や色を見るとそれぞれなるほどうなずける呼び名ですが、野草の種名や別名を調べるとき、その由来についても調べるとまた別な楽しみがあるものです。

# zoo もりおか

第14号 2005年

発行日 平成17年3月29日

編集・発行 (財)盛岡市動物公園公社

〒020-0803 岩手県盛岡市新庄字下八木田60-18  
TEL.019(654)8266

印刷 三陽印刷株式会社